

張作霖爆殺事件と田中義一内閣

平成21年1月10日・高根台公民館

昭和という時代は、「激動の昭和」とか「動乱の昭和」——こう言われているように、敗戦までまさに戦争と動乱に明け暮れた二十年でしたが、その発火点となつたのが、これからお話しする張作霖爆殺事件です。昭和三年六月、滿州軍閥の首領張作霖の乗った列車が奉天、現在の瀋陽で爆破され死亡した事件ですが、時の内閣は長州出身の陸軍大将、政友会の田中義一内閣でした。誰がやったのか。日本国内でも「滿州某重大事件」として大きな政治問題になり、田中内閣は総辞職に追い込まれましたが、国民の前に真相が明らかにされたのは戦争が終わってから、東京裁判の法廷でした。

検察側の証人として証言台に立った元陸軍省兵務局長の田中隆吉少将が、「関東軍高級参謀河本大作大佐の犯行だった」と暴露したのです。それも関東軍司令官も承知している、いわば関東軍の総意によるものでした。関東軍というのは、日露戦争で日本のものになった旅順や大連のある遼東半島と、満鉄といわれた南滿州鉄道の線路を守る警備を任務とした軍隊です。本来は番兵役である出先の軍隊が、勝手に火を点けて騒ぎを起こし、その混乱に乗じて滿州を武力占領してしまおうとした。昭和の陸軍が、政治や外交を押し退けて出てくる。そのきっかけとなつたのが、この張作霖爆殺事件でした。しかも、河本大佐など関係者を軍法会議にかけて厳正に処罰しなかつたため、滿州事変から支那事変、さらには太平洋戦争へと、軍部の暴走を許す大きな原因にもなつたのです。

張作霖は、もともと馬賊上がりです。それが、滿州を事実上支配するほどの大きな力をつけたのは、関東軍の援助があつたからで、田中首相も命の恩人でした。張作霖の祖父は飢饉を逃れ、北京のある河北省から食べ物求めて奉天省へ移住してきた流民です。明治八年、その貧農の家に生まれた張作霖は、八歳の時に父親を亡くし、ろくに文字も知りません。近くの旅籠に奉公するうち、たまたま泊まった馬賊に誘われ二十二歳から八年間、馬賊の頭目として近隣を荒らし回ります。身長五尺二寸、白面瘦身、小柄なやさ男だったようですが、義理人情に厚く、統率力もあって、部下からも慕われていたといえます。日露戦争の奉天の戦いの直後、ロシア軍スパイとして日本軍に捕まつたのですが、「見所がある。生かしておけば必ず日本の役に立つ」。こう言つて、滿州軍総参謀長の児玉源太郎大将に掛け合い、処刑寸前の命を救つてくれたのが滿州軍参謀の田中義一中佐だったのです。張作霖は二百名の部下を騎兵隊に編成して隊長となり、清国軍に

編入されましたが、それ以来田中を兄貴分として敬い、陸軍の出世街道を歩んだ田中もまた、影になり陽なたになつて張作霖の満州支配を助けてきました。大正五年に奉天督軍兼省長になり、昭和二年六月には北京に進出して政府を組織し、大元帥として北は黒龍江から南は揚子江に及ぶ広大な地域に号令するまでになったのです。その張作霖が、いわば後ろ盾である関東軍によつて殺されることになったのは、なぜだったのでしょうか。

中国では、明治四十四年の辛亥革命で清国が減んでから各地に地方軍閥が割拠し、内戦が続いていましたが、蒋介石が中国統一の軍事行動を起こしたのが大正十五年七月です。中国民衆のナショナリズム、反日抗日運動も日増しに激しくなっている時でした。日本では「憲政の常道」という政治的な枠組み、つまり政党内閣制、二大政党時代が形成されつつあった時で、その中で、そうした新しい中国情勢に日本がどう対処するのか。ことに旅順や満鉄など、日本が満州に持つている権益をどうやって守り、広げていくのか。この外交方針をめぐつて、憲政会、政友会の二大政党が激しく対立したこと。そしてもう一つ、日本を襲つた深刻な経済不況が、この張作霖爆殺事件の伏線になっていたのです。

昭和の新しい時代は、「金融恐慌の嵐」と共に明けました。第一次世界大戦でヨーロッパの戦場から遠かつた日本は、空前の軍需景気に沸きました。あれほどあった日露戦争の莫大な借金を、あつという間に返しただけではなく、経済活動も大きく発展しましたが、バブルがはじけるのも早かつたのです。世界的な戦後不況が始まつたところへ、大正十二年九月一日の関東大震災です。京浜地区の産業界は収拾のつかない大混乱に陥りました。工場、商品が焼失し、火災保険金も払われる見込みがないとなれば、ほとんどの企業は立ち行くことが出来ません。支払い不能の手形が続出し、政府は日銀にそうした震災手形を担保に二年間を限度に貸出させ、損失が出た場合には政府が一億円を限度に補償する。こういう救済融資を実施したのですが、金融恐慌の直接の原因はこの措置に潜んでいました。政府とすれば、その二年間の間に企業が再建され、手形が決済されることを期待したのですが、企業の返済は目先の不況に追われてさっぱり進みません。大正の末には震災手形四億三千万円のうち二億円が未決済、焦げ付き同然になっていたのです。

昭和二年の金融恐慌は、「大蔵大臣片岡直温の舌一枚から起つた」——よくこう言われていますが、三月十四日の衆議院予算総会は、震災手形の処理法案をめぐつて白熱していました。憲政会の若槻礼次郎内閣の時で、野党政友会は「震災手形を抱えている不良銀行がどこで、処理法案ではどの企業を救済することになるのか」、「それを明らかにしろ」と迫つたのです。具体的に答えれば、信用不安を広げることになり、さりとて全く答えないわけにもいかず、片岡蔵相は差し障りのない答弁していたのですが、激しい野次に相当頭に来ていたのでしょうか。大

蔵次官から「渡辺銀行が支払いを停止する」というメモを渡されると、「君らが余り騒ぐから、現にきょう正午ごろ渡辺銀行がとうとう破綻致しました」とやっってしまったのです。東京渡辺銀行が「本日の交換尻の決済が出来なくなった」と、大蔵省に相談に来たのは事実なのですが、すぐその後で資金繰りがついて、営業は普段通り続けていました。ただ肝心の大蔵省にその連絡を忘れたため、片岡の早とちり失言になってしまったのです。翌日の朝刊各紙には渡辺銀行休業と蔵相発言がデカデカと掲載され、預金者の取付け騒ぎが始まりました。渡辺銀行はもちろん倒産しましたが、銀行という銀行は黒山のような群衆に囲まれたのです。

この取付け騒ぎが、神戸の鈴木商店の経営危機を一気に表面化させることになりました。鈴木商店は大戦景気の儲け頭です。大番頭の金子直吉は、開戦三か月後の大正三年十一月、ロンドン支店に「鉄鋼と名のつくものなら何でも、金に糸目をつけずに買いまくれ」。こういう指令を出し、まず鉄、次に船舶に手を広げ、大正六年の取扱高は十五億円、三井物産の十一億円を抜いて日本一の貿易商社になっていました。神戸製鋼所、日本製粉など子会社六十を数えましたが、三井、三菱、住友の財閥が自前の銀行を持っていたのに、鈴木商店は台湾の樟脳を扱っていた関係から、金融は政府が植民地台湾開発のために作った特殊銀行台湾銀行に依存していたのです。ところが、極度の輸出不振で返済期限がきても返せません。台湾銀行の方も前の貸しを生かすため、ズルズル追い貸しが重なり、貸出総額の半分、三億五千万円も鈴木商店だけに注ぎ込む結果になっていたのです。

「鈴木商店が危なそうだ」、「鈴木店の震災手形を一杯抱えているのは台湾銀行だ」——噂が飛び交う中、台湾銀行は鈴木商店と絶縁宣言して新規貸出を中止したのですが、すでに手遅れでした。警戒感を強めた三井銀行を皮切りに、大手の銀行が台湾銀行に対するコールローン、「一時貸しの短期資金を返せ」と一斉に回収を迫ったのです。鈴木商店は四月五日に営業を停止しましたが、台湾銀行は鈴木からは取れない、コールも返せない。最後の頼みの綱だったコール市場からも締め出され、営業困難となって日銀に助けを求めました。ところが日銀も、「これ以上台湾銀行に貸すには政府の補償が必要だ」と言います。万一の場合、政府が代わって支払うには議会の承認が必要なのですが、議会は三月末に終わったばかりでした。臨時議会を召集していたのでは、議決を得るまでに時間がかかってしまい、その間に台湾銀行が倒産すれば大混乱になります。そこで若槻内閣は窮余の策として、「日銀が台湾銀行に非常貸出を行い、それによって生ずる日銀の損失を二億円を限度として政府が補償する」。こういう台湾銀行救済策を、緊急勅令の形で枢密院にかけて処理しようとしたのです。

枢密院というのは、条約とか勅令といった重要な国務について、天皇の相談役を務める戦前の最高諮問機関です。四月十七日、昭和天皇も出席された枢密院本会議で、緊急勅令に真っ向から反対したのが顧問官の伊東巳代治でした。伊東は

伊藤博文の下で明治憲法の起草に携わり、自らも「憲法の番人」を以て任ずる、「青鬼」とあだ名されたうるさ型の顧問官です。「緊急処分は、天災や事変で議会が開けない場合に限る。これは憲法違反だ」と言うのです。臨時議会を召集していたのでは間に合わないと言つても、頑として応じません。あげくは台湾銀行の救済策はそつちのけで、若槻内閣の中国外交が弱腰だと、外務大臣の幣原喜重郎を名指しで非難したのです。若槻は回顧録に書いています。「その老顧問官はますます調子に乗つて、陛下の御前も顧みず、八町内で知らぬは亭主ばかりなり」といふ俗悪な川柳まで引いて、外交攻撃をした」と。何も知らない亭主とは、二十六歳と若くして即位された昭和天皇のことです。枢密院の議決には閣僚も加わることが出来ましたが、閣僚全員が出席しても十人ばかり。枢密院の方は長い間休んでいた病人の顧問官まで駆り出したので二十何人。緊急勅令は否決され、若槻内閣はその日総辞職したのです。

後継内閣は、元老西園寺公望の推薦で野党第一党である政友会の田中義一内閣となりましたが、緊急の課題は目前の金融不安をどうやって解消するかです。田中は、自分に政友会総裁のイスを譲つて政界から引退していた高橋是清、この財政のベテランに蔵相就任を要請したのです。激しい取付けで日銀の貸出は月初めの二倍、二十四億円にも達していました。焼却処分にする予定だった古いお札を引つ張り出しても足りず、日銀の金庫は空っぽだったそうです。高橋がひと頃盛んに「平成の高橋是清出でよ」と言われたのも、こうした時に臨機応変、果断な措置を取ったからです。田中内閣は四月二十二日、全国の銀行に二日間の自発的休業を命じると、その間に緊急勅令で三週間の支払い停止、モラトリアムを実施したのです。日銀に対しても五億円の政府支払い補償を決めました。が、枢密院はあっさり承認しました。政府はこの猶予期間を利用して、大車輪で大量のお札を印刷したのですが、それでも印刷が間に合わずに片面刷り、裏が真っ白の二百円札が出回つたというのもこの時の話です。この間、三十六の銀行が休業に追い込まれましたが、五月十日に銀行が店頭で山のようにお札を積んで支払いを再開すると、取付けの嵐はあつという間に沈静化していったのです。

この金融恐慌は、預金者に中小銀行から財閥系銀行へと預金先の移動を促しました。千四百二十もあつた普通銀行は八百八十一に減つて、三井、三菱、住友の三大財閥が財界での地位を不動のものにしたのもこの時です。また、憲政会から政友会への政権交代は、形の上では確かに「憲政の常道」、二大政党の交代を實現させました。しかし、内閣が超議会的な機関である枢密院によつて倒されたのは、日本の憲政史上初めてのことなのです。しかも同じような緊急勅令なのに、枢密院は若槻内閣では否決し、田中内閣では認めています。伊東巳代治ら枢密院の本当の攻撃目標は、最初から幣原外相の中国政策にあり、台湾銀行救済策を利用して、若槻内閣を倒すことだったのです。

実は、日本が金融恐慌で大揺れの最中、中国では「南京事件」が起きていました。いま南京事件というと、皆さんが連想されるのは昭和十二年の日本軍による虐殺事件だと思いますが、これは蒋介石が中国統一の軍事行動を起こした時の話です。蒋介石の国民革命軍は、南の広州から揚子江沿いの上海、南京、武漢を指し三軍に分かれて北上したので、北方軍閥を征伐する、「北伐」と言いますが、事件は昭和二年三月二十四日、革命軍が南京に入城した時に起こりました。勝ち誇った兵士たちが各国領事館や教会、学校へ乱入し、掠奪、暴行でイギリス、アメリカ人などに六人の死者を出したのです。日本政府も揚子江に停泊中の砲艦から十二人の陸戦隊員を領事館に派遣していましたが、何といても多勢に無勢です。領事館から「武力衝突になれば皆殺しになる。抵抗しないでくれ」と頼まれ、やむなく武装解除に応じました。死者こそ出なかつたもの、領事館に避難していた日本人女性が裸にされて市内を引き回される悲惨な事件も起きました。新聞が連日、「残虐！筆舌に尽くしがたい大掠奪」と書き立てれば、野党政友会は「若槻内閣弾劾」を決議、東京など六大都市の商業会議所も「中国に強硬態度で臨め」と要求したのです。陸戦隊の無抵抗は幣原外相の指示ではなく、現地領事のとっさの判断だったのですが、「日の丸が泥に踏みにじられた、こうした国威の失墜は、幣原外交の不干涉主義が生んだのだ。軟弱外交の責任だ」。幣原が四方八方から非難攻撃を浴びている時に、台湾銀行救済の緊急勅令が枢密院で審議されることになったのです。

若槻内閣を倒す絶好のチャンスと見たのが、政友会の対中国強硬論者、森恪です。「つとむ」と読むのが正しいのですが、「もり・かく」と呼ばれているうちに、そっちの方が定着してしまいました。大阪で生まれ、神奈川県足柄上郡で育った森は、日清戦争勝利の時代の風潮に乗って、大陸雄飛の夢を果たそうと、大学には進まず三井物産の支那修学生の道を選びました。天津支店長など二十年近い中国生活で多くの合弁事業を手掛けた後、大正九年に政界入りしました。術策にだけ、実行力のあるやり手でした。陸軍革新を唱える中堅将校とも親しく、森の働き掛けで幣原外交に不満がたまっていた枢密院も若槻内閣倒閣に踏み切ったのです。しかし、日本の政党政治を担ってきた政友会が、選挙によって政権を獲得する政治の大道よりも、枢密院と組んで憲政会内閣を倒す道を選んだことは重大なことでした。枢密院は、政党にとっては本来は対立すべき官僚勢力の代表なのです。

ところで、枢密院、政友会から狙い撃ちにされた「幣原外交」とは、いったいどんな外交だったのでしょうか。ある意味では、大正の末から昭和の初めにかけての日本は、この幣原外交を軸に是か非かで揺れ、結局は戦争への道をつつと走ることになったとも言えるのです。日本が降伏して一か月半、昭和二十年十月に幣原に組閣の大命が下った時、新聞記者はびっくりしたそうです。「幣原さん、まだ

生きていたのか」と。幣原は当時七十三歳でしたが、戦争中は英米派の外交官として全く忘れられた存在でした。占領軍最高司令官のマッカーサー元帥も、「だいたいぶ齢だな。英語はしゃべれるのか」と聞いたようですが、幣原は英語にかけては右に出る者がいないほどの達人でした。この幣原内閣は戦後の首相吉田茂、その時は東久邇内閣の外相でしたが、吉田は幣原外相の下で次官をしたことがあり、占領下の日本で再建を進めるには、英米に信用の厚い幣原が最適だと、各方面に働きかけて実現したものでしたのです。

幣原は五代の内閣で通算五年三か月外相を務めています。これほど長期間、外相のイスに座った政治家は、もちろん過去にはなく、恐らくこれからも出てこないでしょう。その幣原外交に一貫しているのは、寛容主義、自由主義であり、国際協調による平和共存です。今なら「平和五原則」の実行、外相になれば誰でも口にしようなことです。戦前「幣原外交」といえば「軟弱外交」、「弱腰外交」の代名詞でした。朝日新聞でさえ「霞が関外交が著しく自由主義にかぶれているのは覆うべからざる事実である」。こう書いて攻撃するほど、世論調査をしていたら恐らく国民の大半が「ノー」と言っていたでしょう。米英からは高く評価されながら、国民からはボロクソに言われる。戦前のこの大きな落差は、一体どこから来たのでしょうか。

幣原は大阪・門真の豪農の次男坊として生まれました。喜重郎という名前は、長男の坦に続いてまた男の子が生まれた、喜びが重なったと命名されたんだそうです。大阪は徳川時代、大名の支配を受けず商業の中心地として栄えた町です。幣原の自由主義的な合理的な物の考え方は、多分に自由で開放的な大阪に生まれ育ったことが、大きかったように思います。お父さんは入り婿でしたが、「自分が幣原家に尽くせる道は、子供たちを立派に教育することだ」——こう言って、親族会議まで開いて反対する親族を押し切り、田畑の半分以上を売って子供たちを大学に入れたのです。兄さんの坦は東京帝国大学で国史を学び、台北帝大の初代総長になりましたし、妹さんは大阪で初めての女医さんです。京都の三高から東京帝大法律科に進んで、明治二十九年念願の外交官になりましたが、三十年間の外交官生活で半分は外国で過ごし、そのうち八年はアメリカとイギリスです。第一次大戦後に駐米大使を務め、ワシントン会議では全権として首席全権の加藤友三郎を助け、ワシントン条約を纏めました。幣原外交が「親英米的、英米一辺倒だ」と非難された理由は、この外交官の経歴にありましたし、幣原の外交理念もまた、ここから生まれたと言ってもいいでしょう。

豪放磊落、豪傑型の多かったその頃の外交官の中で、幣原は暇さえあれば英語の勉強、国際法の研究をしていたといえます。外務省切つての英語の達人と言われたのも、こうした努力によるものでしたし、幣原が駐英大使時代、書記官をした石射猪太郎はこう話しています。「部下に対して指導とか何とかということとは、

やらない人であった。彼は自分で努力を続け、もっぱら自力で自身を磨いてきた人だから、人もはたから指導を希望すべきでない、という考えに支配されていた。また、組織というものを持たない人で、部下を養成して方々に配置し、その組織の力で動かして行こうというような考えは、幣原さんには縁遠かった」。学閥とか派閥、あるいは先輩後輩といった人間関係が物をいう日本では、珍しい、新しいタイプの外交官でした。「冷たい人だ」とも言われましたし、幣原閥といったものを作りませんでしたから、後年、幣原外交が孤立する原因の一つにもなりました。独立精神旺盛で意志強固、正しいと思つた政策は、誰が何といおうと撤回しません。幣原には、節を曲げない気骨がありました。それは「正しいことをやっているのだ」という、強烈な信念に支えられていたのです。元老の西園寺は、幣原外交に軟弱だと非難が高まつた時、「実は、あれが本当の強硬外交なのだ」と言つたそうです。

幣原が最初に外相になつたのは大正十三年六月、憲政会の加藤高明内閣の時です。幣原の奥さんは加藤首相夫人の妹、共に三菱財閥岩崎弥太郎の娘婿ですが、閥閥による抜擢というよりは、ワシントン体制の時代、国際協調が叫ばれている時です。外務次官、駐米大使を歴任し、ワシントン会議の功績で男爵を授けられた幣原の起用は、当然だつたと言つていいでしょう。幣原は外相就任演説で「日本としては同情と忍耐と希望をもつて、支那国民の努力を望み、統一の成功を祈る」。こう演説して、中国統一の希望と内政不干渉の中国政策を明らかにしました。また外人記者団との会見でも「日本の外交は平和、正義、名譽を基礎とする」と話しています。幣原外交が理想主義外交だと言われる所以ですが、それじゃ理想を求めるだけの空念仏だつたのかというと、決してそうではないのです。とにかく武力を持ち出さない。経済を通じてお互いの利益、良い関係を求めて行こうという、むしろ現実的な経済外交が特色でした。

幣原が考えたのは、中国貿易を盛んにすることでした。日本の前途を国土の膨張、領土拡張で解決しようとするれば、国際協調を破ることになる。中国には四億五千万の民衆がいる。日本の工業でまかなうには手ごころなマーケットであり、日本は距離的にも中国に近く、運賃、賃金の面でも、日本が一番競争力が強い。中国を日本の経済立国の基礎にする。これが幣原外交の根本理念でした。幣原が中国に内政不干渉を唱えたのも、中国統一を期待したのも、それが日本の中国貿易に一番いいと考えたからなのです。

しかし、その頃の日本は毎年百万人の人口の増加、今じゃ考えられないようなことですが、人口増加と慢性的な輸入超過に悩んでいました。移民を出したくても、アメリカは排日移民法で扉を閉ざしています。輸出を増やそうとすれば、諸外国は関税引き上げで対抗してきます。議会で「毎年、和歌山県が一県ずつ増えている。国土ならいいが、人口だけだ。どうするのか」——こんな質問が出るほ

ど、八方塞がりの日本に絶好の解決策として浮かび上がってきたのが、目の前にある満州、蒙古の広大な土地と、無尽蔵の資源だったのです。満蒙への移民開拓で人口問題を解決し、日本の産業振興を図れば一石二鳥です。朝日新聞が社説で「日本の人口食糧問題を解決するには、産児制限励行の消極策か、満蒙移出の積極策しかない」。こう書いたほど、満蒙にはけ口を求め、満蒙に特殊權益を強調するムードが、国民心理になっていったのです。幣原外交が国民に支持されなかったのも、また張作霖爆殺事件が起こったのも、ここに一番大きな原因がありました。幣原が「日本が日露戦争で得た条約上の権利は、満鉄とその付属地だけだ。満蒙に特殊權益などは存在しない」。こう言っても、それは強風の中で口笛を吹くようなもの、ごく限られた少数意見でしかなかったのです。

幣原外交は、それまでの日本の満州政策の百八十度転換でした。と言いますのは、日本はそれまで張作霖の後ろ盾となつて、張作霖を満州の事実上の支配者に押し上げてきました。その張作霖の下で、満州を半ば独立の状態に置いて日本の權益を守る。これが大正初めからの歴代内閣の方針でした。陸軍も各地の地方軍閥に軍事顧問を送り、内戦を支援してきました。つまり、中国は分割統治の方がいい、一つに統一してほしくない。これが日本の本音でした。満州はいくら張作霖が支配していても、中国領土であることに変わりはありませんから、強力な中央政権が出来れば、日本の權益も不安定なものになりかねません。中国統一を邪魔することで日本の權益を守り、また拡張させることを期待してきたのです。

ところが、幣原外交がいくら「内政不干涉」を看板にしているても、現実に内戦が起こり、それが満州に影響しそうな事態になってくると、そうは簡単にいきません。幣原が外相就任早々にぶつかつた難問が、大正十三年九月中旬に始まつた第二次奉直戦争です。奉天を本拠とする張作霖と、直隸派といつて北京など河北省を本拠にする呉佩孚との内戦ですが、張作霖はすぐ日本政府に援助を求めてきました。奉天総領事も「もし張作霖が敗れて、直隸軍が満州に侵入してくれば日本の權益が脅かされる。実力行使も止むを得ない」と、意見具申してきました。しかし幣原は「絶対不干涉主義」をとり、総領事にも「あくまで公正な態度で一党一派に偏するような措置はとるな」。十月に入つて張作霖軍の苦戦が続くようになると、国内でも幣原外交に批判が高まってきました。貴族院で強硬派が「幣原の内政不干涉は米英に追従するものだ」と非難すれば、東京では国民大会が開かれ、「無為無策外交、軟弱外交だ」と氣勢を挙げたのです。

閣内でも幣原批判が強まり、十月二十三日の閣議は「張作霖援助のための出兵止むなし」が大勢を占めました。それでも幣原は譲りません。加藤高明首相は一旦閣議を休憩して幣原を別室に呼び、「妥協の余地はないか」と譲歩を促したのですが、幣原は「出兵すれば辞職する」。外相辞任は内閣崩壊につながります。閣議は結論を出さないまま散会しましたが、その日の夕方飛び込んできた一通の至

急電が加藤内閣を総辞職から救ったのです。「直隸派の將軍馮玉祥が呉佩孚に背いてクーデターを起こし、北京を占領した」という電報です。戦況は逆転して呉佩孚軍は総崩れとなり、日本も出兵する必要がなくなつたのです。実はこのクーデターは、東京裁判で死刑になる関東軍参謀土肥原賢二中佐の画策でした。幣原の不干渉主義に強い不満を持っていましたし、張作霖の方もいつもと違つて助けにきてくれない日本軍に慌てました。土肥原が張作霖に百万円の買収資金を出させ、国家予算十五億円の頃の百万円ですから大変大きな大金ですが、それで馮玉祥を説得した結果の寝返りだったのです。

幣原外交というのは、薄い氷の上をスケートで滑っているようなものでした。幣原外交が成功するには、中国が平和な状態であることが前提条件でしたが、内戦は続いていましたし、反日抗日運動も高まるばかりです。ソ連共産党の国際組織コミンテルンも、これに乗じて中国への働き掛けを強めていました。氷が割れる要素は、いくらでもあつたのです。中国の紡績業は第一次大戦で大きく発展しましたが、戦後不況に勝ち残つたのは大資本をバックにした日本とイギリス資本の工場だけでした。街には失業者が溢れていますから、低賃金、長時間労働でも労働者に不足しません。大正十四年二月、苛酷な労働に抗議して上海の日本紡績がストに突入したのをきっかけに、イギリスの工場にも波及し、五月三十日には上海全市を巻き込む騒ぎに発展したのです。「五・三〇事件」といわれるもので、イギリス官憲がデモ隊に発砲し十三人の死者を出したものですから、コミンテルンの指導による反帝国主義運動は全国的規模に拡大し、広東ではストが十七か月も続きました。

イギリス政府は日本に共同出兵を提案してきましたが、幣原は「一旦政治意識に目覚めた中国のナショナリズムを、力で抑え込むのは不可能だ。かえつて運動を激化させるだけだから、日本としてはこの際、居留民を危険地域から一時避難させる考えだ」。こう言つて出兵を断つたのです。イギリスは単独で武力鎮圧を続け、広東では百六十九人の死傷者を出しました。日本製品のボイコットに代わつて、反帝国主義運動の矛先はイギリスに向けられるようになりましたが、日本国内では相変わらず幣原批判が強かつたのです。政友会が「居留民を避難させるなんて弱腰ではなく、軍隊を送つても日本人を現地で保護すべきだ」。出兵論のボルテージを高めているところへ、中国統一を目指す蒋介石の北伐が始まり、昭和二年三月には南京事件が起きてしまいました。

実はこの事件も、「蒋介石失脚を狙つたコミンテルンの謀略だった」と言われます。当初六万人ほどだった国民革命軍は、瞬く間に十七万人に増加し、上海、南京に迫りましたが、それは多くの共産黨員が国民党に入党し、いわば国民党を隠れ蓑にして、革命実現を図つたことが大きかつたのです。武漢には共産党の影響力の強い臨時政府が樹立され、政治顧問ポロディンを送り込んで、蒋介石の主席

廃止を宣言させましたが、効き目がないうところか、蒋介石の威名は高まるばかりです。このままでは、中国統一成功は全て蒋介石の手柄になってしまう。失脚させるには、国際的信用を落とせばよいと、共産党員が勝ち誇った兵士を扇動し、各国領事館を襲撃させたものだったのです。

昨年十月末、田母神俊雄航空自衛隊幕僚長が「日本が侵略国家だったというのは濡れ衣だ」。政府の公式見解である、いわゆる「村山談話」を真つ向から否定する論文を発表して更迭されました。張作霖爆殺事件についても、「最近ではコミンテルンの仕業だ」という説が極めて有力になってきている」。こんなことを書いていますが、コミンテルンの働き掛けはあくまでも蒋介石の国民革命軍に対してなのです。肝心の河本大作大佐の供述をはじめ、多くの歴史的事実には何一つ検証を加えていないのですから、ひどいものです。過去の過ちを認めることが、そんなに恥ずかしいことなのか。二度とそうした国家にしないように努力することが、日本をいい国、誇りのある国にする道だと、私は思います。

それはともかくとして、現地では日本をはじめ英米仏伊の五大国公使会議が開かれ、蒋介石に謝罪と賠償、責任者の処罰を求め、覚書にはタイム・リミットをつけることを決定して、それぞれ本国政府に訓令を仰いだのです。この決定に真つ先に「待った」をかけたのが幣原です。幣原は、中国を統一できる信頼すべき指導者は蒋介石以外にいないと思っていましたし、蒋介石が責任を取ると言明している以上、その自主性に任せるべきだ。タイム・リミットをつけた覚書は威嚇であり、報復手段としての砲撃、封鎖にも反対しました。やがてアメリカ政府も同調し、蒋介石の自主的解決に任せることになりましたが、納まらないのは日本国内です。政友会は四月十五日、若槻内閣総辞職の二日前ですが、臨時大会を開いて田中義一総裁が幣原外交を批判しました。「徒に内政不干渉に口を借りて、手を拱いて傍観することは、明らかに帝国の東亜における地位の放棄である。東亜の盟主たる日本は、対支外交の刷新を期さねばならぬ」。田中が盛んに口にした「東亜の盟主」。日本が一等国になった、五大国になった。そう自負している国民は多かったし、中国に対しても「チャンコロ、チャンコロ」と、一段低く見る蔑視意識が強かったのです。

田中内閣は、そうした中国に対して「強硬態度で臨め」と、まさに国民期待の中でスタートしたのですが、田中は幣原とはあらゆる面で対照的な人でした。幣原が国際協調主義者、いつも平和国家をイメージしていたのに対し、田中は「日本の国是は武である」。日本の武力を世界に示すことは日本の名誉であり、国家目標でもあると考えていました。田中が首相になったのは六十三歳の時ですが、「オラが、オラが」と山口弁丸出ししゃべるので、それが親しみやすい庶民的な感じを与え、「オラが総理」と国民的な人気も上々でした。新聞記者は、ライト式建築で完成したばかりの首相官邸、今は首相公邸になっていますが、「カフエー

・オラガ」と呼んでいたそうです。しかも幣原外交に代わって、強硬外交の担い手として登場したのです。陸軍にとつても、米騒動で大正七年に倒れた寺内正毅内閣以来八年半ぶり、期待の首相でした。それなのに、張作霖爆殺事件という、いわば身内の陸軍に裏切られ、総辞職に追い込まれることになったのは、一言で言えば、政治家として一番大切な見識、これに欠けていたことが大きかったのだと思います。

田中は参謀次長時代、大正七年のシベリア出兵を立案し、拡大させた張本人です。ところが原敬内閣の陸軍大臣に就任すると、手のひらを返したように兵力削減、撤兵論に転じました。やがては政界入りを考えていた田中が、「もう政党内閣の時代だ」と、撤兵論の原首相に擦り寄った結果でしたが、典型的なマッチ・ポンプです。自分で火を点けておいて、今度は消す側に回ったのです。よく言えば交通自在、悪く言えば優柔不断。首相になっても、このマッチ・ポンプ式の綱渡りで、絶えず外交方針がぐらつきました。これが「田中ではダメだ」と、陸軍部内の不信感を買ひ、関東軍の暴走にもつながることになったのです。頑なまでに自分の信念を貫き、妥協しなかった幣原とは好対照でした。

×

×

田中義一は明治維新に四年先立つ元治元年、長州・萩に生まれました。「長州でなければ人でない」とまでいわれた長州全盛の陸軍でしたから、長州閥のホープとして出世街道を歩みましたが、若い頃の田中はそれはもういろんな職業を経験し、大変な苦勞人だったのです。お父さんは陸尺といって、殿様の駕籠を担ぐ足軽の中でも一番低い身分です。ただ武士であることを誇りにし、田中にも武士道精神、尊皇精神を徹底して叩き込んだといえます。明治になってから傘作りをしていましたが生活は苦しく、田中は十一歳になると月給六十銭の村役場の給仕。小学校の先生をした後、長崎裁判所の判事をしていた人の書生になり、対馬、松山とその任地を転々とした末、明治十六年二月、二十歳の時に陸軍教導団の砲兵科に入隊したのです。正規の教育を受けていませんから、まず下士官を養成する教導団に入ったのですが、念願かなって士官学校に進んだのはその年の十二月でした。ですから、同い年生まれに比べ二、三年遅れて卒業していますが、こうした若い時の苦勞が、田中の生き方、考え方を作ったように思います。

親分肌で義理人情に厚く、頼まれれば「いや」とは言えない性分でした。陸軍中尉の薄給の身なのに、士官学校をめざす郷里の後輩など、頼まれるままに七人も下宿に抱え込んでいたといえます。人の心を掴む、人心収攬の機微にも通じていました。これは戦後農林大臣をした内田信也が書いているのですが、田中が総裁就任披露に北海道大会に出かけた時です。出迎える羽織袴の男に「どうだい、お父さんは変わらないかネ」と、親しげに声をかけます。「昨年亡くなりました」と聞くと「やー、それは気の毒じゃったのう」と、真情を顔に浮かべて労わります。

内田が「総裁、お知り合いですか」と尋ねると、田中は「いや、俺は知らんよ」。そして「女房や子供を持たない者はあるが、おやじを持たぬ者はいないから、聞いてみただけさ」。一同大笑いしたといいますが、こうした大衆との接し方、親愛感、田中の特技でしたし、田中人気もここにありました。

田中は明治三十一年、三十五歳の時に四年余りにわたりロシアへ留学しています。「世界一の陸軍大国」であるロシア軍の実情、作戦、動員、編成から兵器などの調査研究が任務でしたが、田中のやり方は実に徹底しているのです。まず一年間ロシア語を勉強し、楽に話せるようになってから方々へ旅行しています。それも軍隊の駐屯地だけでなく、ストやデモのあった土地は必ず訪ねて、リーダーと食事しながら話を聞いています。帝政ロシアに潜む革命の火種を、自分の目と耳で確かめたのです。将校はほとんどが貴族ですから、彼らと付き合うにはダンスを踊れなくてはなりません。海軍から留学中だった広瀬武夫大尉、やがて旅順口閉塞作戦で戦死して軍神と仰がれる広瀬を誘って、帝室付の女性ダンサーに竹のムチで腰を叩かれながら習いました。ロシアを知るには、ロシア人の風俗、習慣に同化しなければダメだと、ロシア正教に入信し、説教を聞きに行つて長時間お祈りをし、聖像にうやうやしく接吻までしたそうです。名刺も「ギイチ・ノブスケ ヴイツチ・タナカ」、姓と名前の間に父信佑の名を入れたのですが、「ヨシカズ」と読んでいた名前はこれ以後「ギイチ」と呼ばれるようになります。

明治三十三年六月、ロシアを訪問された閑院宮、後に元帥、参謀総長となる戴仁親王に頼んで、その口添えで念願の首都駐屯の歩兵連隊に隊付勤務を許可されたのです。田中は兵隊たちと一緒に寝起きして、その庶民感覚の目でロシア陸軍の欠陥を鋭く見抜いています。貴族の将校と兵士との階級的な隔たりが大きく、将校は兵士を奴隷のように扱い、兵士は将校を恐れてはいるが、軍隊の生命である上下一致の精神的結合がない。参謀は特権階級のような存在になつていて、前線に出たがらない。「表面は強力に見えても、内部に弱点をいっぱい抱えている」と報告しています。

そこへ日露協商の道を探りに、首都ペテルブルクへやつて来たのが元老の伊藤博文です。三十四年十一月、日英同盟締結の直前ですが、陸軍の駐在武官三人で一席設け、ロシア軍の実情、シベリア鉄道の輸送力を説明して、「戦うなら今だ」と開戦を迫つたのですが、伊藤はこう言います。「兵隊と弾薬ばかりでは、戦争はできません。先立つものは金だ。ロシアは二十億も正貨の準備があるし、フランスの中央銀行にもたくさん預けている。日本はほんの一億か、せいぜい二億。実に心細いものです」。翌日、伊藤が公使館でくつろいでいるところへ田中少佐がやつて来ました。「ロシアが侵略の姿勢を変えない以上、日本としては国運を賭して戦うほかにありません」。テューブルを叩かんばかりにして迫ると、伊藤は「青二才の書生論を聞きにペテルブルクに来たんじゃない。もう帰れ」。「青二才

とは何ですか。閣下が維新の大業に奔走された時は何歳でしたか。青二才だったじゃありませんか。私はすでに三十八歳になっています」。最後は「貴様のような奴がここにいるのは国交上の邪魔だ。東京へ電報を打って帰朝させるから覚悟せい」となり、間もなく田中に帰国命令が出たので、田中は伊藤の差し金だと辞職まで考えたといえます。実際は日露関係の緊迫化で、田中の知識、情報を生かすため参謀本部勤務にしたのですが、元老中の元老である伊藤に一步も引かないあたり、若い頃の田中の気概がうかがえます。

陸軍時代の田中は、とにかくやり手でした。日露戦争が終わると、日本陸軍もロシア軍のようにならないように、参謀将校が進級するには、必ずその前に部隊勤務をさせるとか、陸軍改革に次々と手を打っています。「政治軍人」のはしりでもありました。在郷軍人会や大日本青年団を作ったのも田中なのです。軍隊を除隊した者の団結を固め、それによって軍隊教育を国民一般に広げる。青少年に団体訓練をして、協力精神、犠牲的精神を植え付ける。「社会の軍隊化」を考えたのです。陸軍の大御所山県有朋は、目を細めるようにして田中を可愛がったといえます。山県の未亡人貞子は「山県は誰よりも田中さんが一番好きでして、田中、田中と言っておられました、いつ見えてもガミガミ小言ばかりです。しかしその小言の後では、二人で食事などせられて帰られるのが常でした」。こう話していますが、田中が夜密かに山県の門を叩けば、その翌日には、田中の主張は山県の意見となって実現されました。現役の軍人である田中が、民間団体の大日本青年団を作ることが出来たのも、背後に山県がいたからでしょう。

その田中が大正十四年四月、政友会総裁へと華麗な転身をした時は、世間はびっくりしたそうです。原敬が暗殺された後の政友会は、強力な指導者を失って派閥抗争に明け暮れし、原の後を継いだ高橋是清も優れた政治家ではあつても、党内を纏めるといった政治手腕には乏しい人でした。高橋が「総裁を辞めたい」と言い出した時、政友会が「表看板」に担ぐべき人として、田中総裁論が急浮上してきたのです。田中には、陸軍を引っ張ってきた指導力、実行力、陸軍大臣を二度もやったネームバリューがあります。衰えたりとはいえ長州閥がありますし、在郷軍人会の組織力もありました。その頃政友会との合同を進めていた革新倶楽部の古島一雄が、「君は今度商売違いの政党総裁になるそうだが、政党は選挙をやつて初めて自分のものになる。君は政友会を率いて選挙に勝つという見込みがあるか」。こう尋ねたところ、「おお！それはある。俺は在郷軍人三百万を持つておるのではう！」と答えたといふのです。

「田中金脈」といわれた豊富な資金調達能力、これも大きかったです。内田信也が「風雪五十年」に書いているのですが、金貰いの名人といわれた代議士が田中総裁を訪ねて選挙費用を貰い、しばらくしてお礼を言うつもりで訪ねたところ、いきなりまた金包みをくれます。「これぞ天の恵み」と懐に収めて帰りましたが、

すっかり味をしめて三度目の訪問をすると、田中は「お主はもうこの間すんだじやろうが」。ちゃんと覚えていたのです。こうした湯水のような金の出所は、田中と同じ萩出身の藤田伝三郎が作った藤田組、そして藤田の甥の久原房之助でした。田中は政友会総裁になる時、三百万円を持参金にしたと言われています。シベリア出兵の陸軍機密費を公債に変えたものを担保として、神戸の高利貸し乾新兵衛が融通し、その代償として利権供与を約束したんだとか、金銭に関しては黒い噂の絶えない人でした。

田中は上下関係、派閥とか地縁、血縁を大切にしました。長州とはいえ、富も権力もない家に生まれた男が、出世をつかむには欠かせないものだったのでしよう。しかし首相になってからも、そうした義理人情の世界に頼り、流されたところに、田中の失敗がありました。パトロンの久原に報いるため、外交に素人の久原を外務大臣にしようとしたのはその典型です。さすがに党内の反対で撤回しましたが、それでも通信大臣にしたあたり、「利権人事」と言われても仕方のないような軽率な人事でした。

軍人時代の田中は、精悍で隙のない、何事にも即応出来る「信念の人、実行の人」が定評でした。日露開戦前の御前会議に、参謀本部参謀の田中は、シベリア鉄道の輸送力について嘘の報告をしています。部下の調査では一日八列車でしたが、そんなに輸送力があると聞けば開戦論者も怖じ気づいてしまふ。田中は、シベリア鉄道が単線で、まだ完成していない今こそ開戦のチャンスだ。複線になって輸送力が強化されてからは手遅れになると、部下に一日六列車と嘘の報告書を作成させたのです。「薬を飲もうとしない殿様に、水だといって薬を飲ませるのは、家来の忠義だ」。こう言って部下を説得したんだそうですが、良くも悪くも田中のそうしたリーダーシップは、首相になると急速に色褪せていきました。豊臣秀吉が大好きで、「積極進取、進んで取る」がモットーでしたが、まあ晩年の秀吉のようなもので、「茫漠とした考えを持つ、隙の多い、頼りない人」、これが田中の評価となっていたのです。

田中内閣は、中国の山東半島に三回出兵しています。蒋介石の国民革命軍が揚子江を渡り、日本人居留民の多い山東省に近付いてきたためです。幣原外相だつたら、居留民を安全な場所に避難させていたでしょう。しかし政友会も田中も、そうした幣原外交を「軟弱だ、弱腰だ」と非難し、「居留民はあくまで現地で保護する」——つまり「出兵してでも」というのが、田中内閣の看板でした。だから、勇んで出兵させたのかという点、実は田中は出兵の都度ためらっているのです。一国の首相ともなれば、諸外国がこの出兵をどう見るか。反日、排日運動を刺激することにないか。あれこれ気配りし、慎重になるのは当然なのですが、結局は強硬論の外務政務次官の森恪に押し切られ、出兵となつてしまいました。政務次官というのは、盲腸のような、あってもなくてもいい存在だと言われ、今は

副大臣と名称をちよつぱり偉くしましたが、森は並みの政務次官ではありませんでした。田中は自ら外相を兼務し、政務次官には二年生議員で四十五歳の森を抜擢、「君に外務省と外交の一切を任せる。事実上の外務大臣という肚でやってくれ」。こう申し渡し、森もまた強硬政策で外務省を引つ張っていったのです。

田中内閣発足から二か月ほど経つた昭和二年六月、「東方会議」なるものを開いています。議題は、蒋介石の北伐にどう対処するか、滿蒙の日本の權益と治安秩序をどうやって守るかでしたが、派手好きな田中らしく、外務省、陸軍省、参謀本部の首脳のほか、現地の関東軍司令官や中国公使、奉天総領事まで集めた総動員方式の会議で、しかも十一日間にわたるといふ大がかりなものでした。ところが議論百出、いろいろ意見が出たまま纏まらず、田中外交が混乱する原因ともなつたのです。中でも真つ二つに割れ、対立したのが滿蒙問題でした。田中がこれまで通り張作霖を利用しようとしたのに対し、森や関東軍は「もう張作霖はダメだ。そんな手緩いことをせず、日本の投資と技術で直接滿蒙を開発すべきだ」と主張します。というのは、日本が育ててきた張作霖の力が余りにも大きくなり過ぎ、おいそれとは日本の言いなりには動かなくなつていたのです。

張作霖が奉天軍を率いて北京に入ったのは大正十五年四月ですが、政府を樹立し、大元帥を名乗るようになる、中国全土に号令したい野心も出てきます。しかし、反日、抗日運動が燃え盛っている中では、今までのように日本にだけ頼っていたのでは、肝心の民衆の支持が得られません。張作霖は、滿鉄と並行する鉄道を作ろうとしたり、奉天省内の日本領事館の分館設置を拒否したりして、反日的な色彩を強めていったのです。滿鉄が日本にとって「宝の山」なのは、滿州を縦断する唯一の鉄道で、滿州の資源輸送を一手に握つていたからです。それを滿鉄と並行する鉄道を作ろうとして、アメリカに借款を働き掛けたものですから「誰のお陰で偉くなったのだ」、「忘恩の徒だ」と、関東軍や対中国強硬論者の間で張作霖打倒論まで飛び出している時の東方会議だったのです。

田中の失敗は、「田中内閣はあくまで張作霖でゆく」——この張作霖支持の方針をきちんとしてきたことでしょう。田中が毅然とした姿勢を見せていたら、その後の事態は変わっていたかも知れません。ところが会議は、張作霖に対する考えが田中と関東軍では全くずれたまままで終わつてしまいました。しかも最終日の七月七日、「対支政策綱領」を発表して、「必要に応じ断乎として自衛の措置を取る」。武力行使を匂わせる強硬方針を打ち出したものですから、これが関東軍に「いざ」という時は武力行使の期待感を持たせましたし、張作霖爆殺事件につながることもなつたのです。

この東方会議は、「田中上奏文」という有名な怪文書騒ぎも起こしています。田中首相が「中国を征服し、世界制覇の計画を立てた」と、会議の結果を天皇に上奏したと言つのです。中国語の訳だけで十種類、英語、ロシア語、ドイツ語に翻訳

され、戦前の隠れたベスト・セラーだったそうです。上奏文としての形式もでた
らめで、単純なミスだらけ。完全なでっちあげ文書でしたが、こんなものがまこ
としゃかに世界中を駆け巡る背景はありました。日本の山東出兵で中国が神経を
尖らせている時です。森恪が派手に宣伝したので、新聞も「田中強硬外交が登場」
と大々的に報道しましたし、外交当局者だけでなく軍首脳部まで集まって、十一
日間も密議を凝らしたとなれば、それなりの説得力はありました。犯人について
は日本に留学している中国人学生だとか、いろんな説がありますが、はっきりし
ません。日本政府が怪文書のことを知ったのは二年ほど経ってからですが、田中
首相の国際的な評判を落とし、「軍国主義日本」のイメージを膨らます結果になり
ました。これもいたずらに大げさな会議にした、田中の軽率さでした。

田中の張作霖支持の背景には、張作霖を抱き込んで満蒙に鉄道を増設する計画
があったのです。狙いは、万一ソ連と戦争になった時、北満州のハルビン、チチ
ハルにいち早く軍隊を送る戦略鉄道です。五本の鉄道を作って満鉄と繋ぎ、経済
開発にも役立てようというのですが、「弟分の張作霖なら自分の言うことはきく
はずだ」と思っていました。そこで政友会幹事長の山本条太郎を満鉄総裁にする
と、外相代理として張作霖と交渉させたのです。外務省には森政務次官のように
「張作霖切り捨て派」がいましたから、外交ルートを通さない、従って中国公使も
知らない秘密交渉でした。張作霖はこの鉄道計画に、「まるで他人の血管や神経
が、自分の体の中に入っているようなものだ」と怒ったそうです。山本は脅した
り、すかしたり、最後は「イエスカノー」と詰め寄ったのです。「ノー」の場合は
日本と戦争する覚悟があるかということですが、密約が成立したのは昭和二年十
月十五日でした。五本の鉄道建設を満鉄が請け負い、代金は借款にするという内
容で、張作霖には反対派の買収資金として五百万円が渡されました。山本は「こ
れで日本は、満州をすっかり買い取ったも同然だ」と思ったそうです。

実はその直前、十月五日のことですが、田中は蒋介石と箱根で会談しているの
です。蒋介石は明治四十一年、日本の陸軍士官学校が中国人留学生のために作っ
た振武学校に学び、士官候補生として新潟県高田の野砲兵第十三連隊に勤務しま
したから、日本の軍人、政治家にも多くの知り合いがいました。国民党の内紛で
革命軍総司令を退くと、日本の有力者に国民革命の意義を認識させ、協力を得よ
うと来日したのです。会談に同席した国民党幹部の張群は、蒋介石が「中国革命
の目指すところは全国統一である」。こう述べたところ、「田中はサツと顔色を變
えた」と回想しています。田中が強調したのは「まず揚子江から南を固めよ。何
でそんなに北伐を急ぐのか」ということでした。田中は中国の共産化を警戒し、
それを防げるのは蒋介石しかいない。出来るだけ援助をしたいとは思っていまし
ましたが、蒋介石が中国を統一すれば、それが張作霖政権崩壊に繋がり、ひいては進
めている満蒙五鉄道の計画もつぶれてしまいます。ここに田中のディレンマがあ

りました。蒋介石の方は「中国統一が完成した暁には、日本が承認すること。また満蒙における日本の特殊権益を認める」と、最大限の譲歩を示しましたが、田中はどうとう「北伐を支持する」とは言いませんでした。蒋介石は、失望ぶりを日記書いています。「日本の協力は問題外である。田中が我々の革命を望んでおらず、北伐を妨げることを躊躇せず、統一中国を容認出来ないことは余りにも明らかである」。もし憲政会内閣が続いていて幣原が外相だったら、少なくとも中国統一の期待を示していたでしょう。歴史というものは、ほんのちよつとした綾でその進路を変えてしまうものです。

日本から帰国した蒋介石が革命軍總司令に復帰し、北伐再開を宣言して北京を目指し進撃を開始したのは昭和三年四月七日です。山東省の省都である済南の張作霖軍を包囲する形をとったため、済南駐在武官の酒井隆少佐は十六日、参謀本部に打電しました。「日本八出兵ヲ決心スヘキ時機ニ到達セルモノト認ム」。済南や山東半島には二万人近い日本人がいます。田中内閣は十九日、第二次出兵を決定、天津から歩兵三個中隊を急派し、内地から熊本の第六師団を派遣したのです。張作霖軍が三十日夜撤退したため蒋介石軍は済南に無血入城しましたが、日本軍とは城壁一つを隔てて対峙する異常事態です。五月三日期には、小競り合いから日中の正規軍最初の戦闘になり、これが長い戦争の序幕となりました。

しかも「済南事件」と言われる日本人虐殺事件が起きてしまったのです。毎日新聞は「天津特電」で、「虐殺された邦人は二百八十名に達した」、また「北京特電」で「裸体で凌辱惨殺された婦人等酸鼻を極めて」と伝えていきます。まあ、こんな記事を読めば、誰だつて憤慨するのは当然なんです。毎日新聞百年史によると、酒井少佐が出兵を拡大させるため、謀略的な情報操作をしたものだったというのです。実際は日本軍の戦死十名、在留邦人の犠牲者も十二名。それも日本軍の警備地区への引き揚げ勧告を無視して、現場に留まったモルヒネ・ヘロインの密売物者でした。酒井は太平洋戦争開戦直後、第二十三軍司令官として香港を攻略しましたから、ご記憶の方も多いと思いますが、武力で大陸の主導権を握ろうと、でつち上げ情報を流し続けたというのですから、ひどいものです。もう張作霖爆殺事件、満州事変の前から、目的の前には手段を選ばない——これが陸軍中堅将校の考え方になっていたので。そして迷惑通り、八日には名古屋の第三師団派遣と第三次出兵になりましたが、この出兵が蒋介石の国民政府に排日政策をとらせるきっかけになったのですから、まさに日本の歴史の分岐点でした。

蒋介石軍の主力は、日本軍との衝突を避けて済南を迂回して北上し、北京に迫りました。田中首相にとって問題は、「蒋介石と一戦交える」と言つて北京から一歩も引かない構えを見せている張作霖です。張作霖軍の劣勢は明らかで、敗れば田中の満蒙政策も元の木阿弥です。そこで田中内閣は五月十七日、「蒋介石軍でも張作霖軍でも、武装したままでは満州に入れない。ただし、張作霖軍が早期

に秩序よく撤退してきた場合は、武装解除は必要としない。こういう「治安維持宣言」を閣議決定し、各国大使にも通告したのです。つまり、張作霖に「奉天に引き揚げるなら今だぞ。戦闘になつてからでは武装解除するぞ」と脅しをかけ、元陸軍大臣の山梨半造や久原房之助を特使に送つて張作霖を説得したのです。

切羽詰まつた張作霖が、二十両の特別列車で北京を脱出したのは六月三日の午前一時五十分でした。貴賓車の前後に鉄鋼車両が一両ずつ、機関銃隊も乗り込んでのものものしい蔽蔽ぶりでしたが、翌日の四日午前五時半、列車が奉天駅まであと十数分の瀋陽駅にさしかかったところで轟音と共に爆破されたのです。張作霖は娯楽室で麻雀中でしたが、副官が「間もなく奉天」と告げたので、軍事顧問の儀我誠也少佐らが立ち上がるうとした時です。八両目の貴賓車は跳ねとばされて炎上、張作霖は血に染まつた倒れ、間もなく出血多量で五十四歳の生涯を閉じたのです。

第一報は五時間後に真つ先に陸軍省に入り、新聞各社は「陸軍省入電」を夕刊トップで伝えました。張作霖の傷は微傷、わずかな傷とされましたが、危篤説も流れ、その安否に世界の注目が集まつたのです。各新聞社の奉天支局はここぞとばかり「奉天特電」を打ち続けましたが、あやふやなものばかり。田中首相でさえ、山本満鉄総裁への手紙で「彼は幸運児だから、すぐ元気になるだろう」と書いていたくらいです。張作霖の死がはつきりしたのは、二週間後の十九日になつて、長男の張学良が後を継いで奉天省督弁事務代理に就任したことがわかつてからでした。

誰がやったのか——中国の新聞は一斉に「背後に日本軍あり」と書き立てましたし、元老の西園寺公望も「どうも怪しいぞ。人には言えぬが、どうも日本の陸軍あたりが元凶じゃあるまいか」と言つたそうです。陸軍省の発表も、発生から八日も経つた十二日と遅れました。現場は北京と奉天を結ぶ京奉線と、日本の満鉄線が交差している所です。陸橋の下は満鉄線の一部ということで、関東軍の警備地域になっていましたが、張作霖の奉天帰還に際して「中国憲兵を配置して警戒したい」との申し入れがあり、関東軍も認めたというのです。陸軍省発表では「四日午前三時ごろ、日本の監視兵が満鉄線路の土手で三人の怪しい中国人を見し、二人は刺殺したが、一人は逃走した。死体から爆弾二個と蒋介石軍の電信の断片が見つかった。蒋介石軍の便衣隊の犯行であることは疑いない」。こういった内容で、便衣隊というのは平服で破壊工作にあたる特殊部隊のことです。

日本の国民は「日本軍は正義の軍隊」と信じていましたから、額面通り受け取りましたが、中国や外国では「関東軍がやったんだ」という声が強かったです。これが「関東軍高級参謀河本大作大佐の犯行」と明らかにされたのは、最初に話しましたように東京裁判の法廷でしたが、長いこと河本の個人的な犯行とされてきました。ところが張作霖殺害が、実は「関東軍司令官の村岡長太郎中将の計画だつ

たこと、河本はその意を汲んでやったのだ、そして責任をひつかぶったのだ」。事件の真相が、河本自身の口から語られる形ではつきりしたのは、平成九年十一月、読売新聞が中国の太原で戦犯として収容されていた河本の供述調書を入力して、「This is 読売」という雑誌に発表してからでした。

全ては昭和三年五月十七日の閣議決定、「張作霖軍も蒋介石軍も、武装したままでは満州に入れない」という「治安維持宣言」から始まっていたのです。深夜、この連絡を受けた旅順の関東軍司令部では煌々と明かりが灯り、参謀長の齋藤恒少将は「戦争だ、戦争だ！」と口走りながら走り回っていたそうです。村岡軍司令官は、奉天駐屯の第十四師団から半分を万里長城の山海関に近い錦州に派遣、軍司令部も奉天に進出することにして、参謀本部に許可を求めました。錦州に出るには、「奉勅命令」といって天皇の命令が必要なのです。関東軍が国際的に管轄権を認められている満鉄付属地以外への出兵、つまり国外への出兵になるからです。関東軍はもう、張作霖を見限っていました。張作霖軍が来たらを武装解除して張作霖の手足をもいでしまい、満州を直接日本軍の影響下に置こうとしたのです。しかし、鈴木庄六参謀総長は、政府の承認がなければ出兵費用が出ませんから、関東軍に「別命あるまで出動は待て」と指示し、田中首相に相談すると「二十一日に上奏して裁可を得よう」と言います。そこで「二十一日に奉勅命令が出る予定」と関東軍に打電したのですが、奉勅命令はとうとう出なかつたのです。

「治安維持宣言」に、英米の新聞は「日本はついに満州を保護領とした」と書き立てましたし、アメリカ政府も「中国の主権侵害」と抗議してきました。アメリカの動きには、神経質になっている田中首相です。関東軍の矢のような催促にも田中は動かず、関東軍には「何だ、田中も弱腰外交じゃないか。優柔不断だ」と不満が渦巻きました。奉勅命令が出ないまま、張作霖軍は五万人が奉天への引き揚げを終わり、山海関には二十五万の大軍が集結する事態です。関東軍の本来の兵力は一万四千なのですが、済南に一個旅団派遣していて実際の兵力は九千人に過ぎません。このまま出て行けば挟み撃ちにあうことになり、張作霖軍武装解除のチャンスはなくなつたのです。

河本が関東軍の高級参謀になつたのは大正十五年三月ですが、満州で目のあたりにしたのは、張作霖反日の気炎でした。東方会議でも何ら満蒙問題の具体策が決まらず、河本は「満蒙問題の解決は外交手段ではダメだ。武力発動によるほかない。そのためには張作霖を倒す以外にない」と思つたのです。爆殺二か月前、陸軍の親友に宛てた手紙に、こう書いています。「満蒙問題の解決は理屈では誰も出来ぬ。武力のほか道なし。張作霖の一人や二人ぐらい、野垂れ死にしても差し支えないじゃないか。今度という今度はやるよ。止めてもどうしてもやってみる。僕は唯々満蒙の地に血の雨を降らすことのみが希望」。

河本の供述によると、張作霖爆殺の経過はこうでした。武装解除の機会を逃し

たため、三十万の張作霖軍と正面衝突の恐れが出てきました。村岡軍司令官は優勢な張作霖軍の指揮攪乱を狙って、張作霖暗殺を考えたというのです。北京で暗殺しようと、竹下という中佐を派遣することにしたのですが、これを聞いた河本は、「成功の可能性は低い。軍司令官がそこまで本気なら、これは自分たち参謀でやるべきだと思った」。手段は爆破による列車転覆、場所は満鉄線と京奉線の交差点。この地域を担当する独立守備隊の中隊長東宮鉄男大尉を呼んで話すと、「是非やらせて下さい」と言います。爆破犯人に仕立てるため中国人の麻薬中毒患者三人を現場に連れて行って、列車と一緒に爆殺する予定でしたが、途中で逃げ出され、二人は刺殺したものの一人に逃げられてしまいました。そこで死体を爆破地点に運んで、ポケットに「張作霖を殺せよ」との蒋介石の命令書を忍ばせたんだそうです。河本は、この爆破で張作霖軍との衝突を起こし、一挙に満州を武力占領する計画でしたが、張作霖軍が動かなかつたため不発に終わったのです。

田中内閣の中で、これが「関東軍の起こした事件だ」と、いち早く知ったのは鉄道大臣の小川平吉でした。小川はいわゆる支那浪人の後援者で、その情報ルートから入ってきた話です。爆破犯人の便衣隊に仕立てるため、河本の依頼で麻薬患者を調達した劉戴明という中国人が、「中国官憲の追及で身辺が危険になった」と支那浪人に助けを求めてきたのです。田中首相は小川から聞いて愕然とし、「親の心子知らず」と嘆いたようですが、陸軍大臣の白川義則もなかなか信じようとはしません。小川は、とにかく張学良に決定的な証拠を握られなければもみ消せると、支那浪人に五千円渡して劉戴明を大連に隠れさせました。陸軍省が本当に関東軍がやったのか、関東軍に問い合せてもうちが明きません。白川が憲兵司令官を現地に派遣して真相が明らかとなり、田中首相に報告されたのは十月八日のことでした。爆薬を仕掛けたのは朝鮮軍から秘かに派遣された桐原という工兵中尉でしたが、酒に酔った勢いで自慢話をしたのが憲兵の耳に入ったのです。

元老の西園寺は、田中首相から報告を受けて、徹底調査して全貌を公表し、責任者を軍法会議にかけて厳罰にするよう、強く求めました。「日中関係に一時的に悪影響があるかも知れないが、長い目で見れば、その方が日本の国際信用を高め、中国との関係にも良い影響が現われる」。そう考えたのですが、西園寺の大変な見識です。西園寺から「とにかく陛下にだけは申し上げておけ」――釘を刺された田中ですが、即位の大典、観兵式、観艦式などの奉祝行事が続いたため、天皇への報告十二月二十四日と遅れました。「事件には日本の軍人が関与しているようであり、法に照らして厳然たる処分を行ないます」と上奏したのです。

天皇から「軍紀は厳格に維持するように」と注意を受けた田中は、白川陸相に河本大佐の軍法会議を要求しましたが、陸軍の組織を挙げての抵抗は猛烈でした。河本も会員になっている陸軍中堅将校の国策研究会「二葉会」は、「河本を守れ」と陸軍上層部を突き上げ、軍法会議反対運動を展開したのです。内閣でも、小川

鉄道大臣と森恪が中心になって各閣僚に公表反対を説いて回りました。日本が中国で承認していたのは、蒋介石の南京政府ではなく、張作霖の北京政府でしたから、他国の元首の地位にある者を日本の軍人が暗殺したと公表すれば、日本の信用はガタ落ちになり、満州での日本の地位も危うくなるということです。

一方、野党の民政党、憲政会は合併で民政党と名前を変えていましたが、満州視察に行った松村謙三代議士らの報告で、事件の真相をほぼ正確に掴んでいました。松村ら六人が満鉄で新京に向かう途中、この事件に遭遇したのですが、林久治郎奉天総領事の所へ駆け付けると、「陸軍の連中がやったんだ。これは容易ならんことになる」と言います。林は松村の早稲田大学の先輩で親しい間柄でしたから、松村は中国官憲との共同調査の結果についても詳しい情報を得て帰国したのです。それによると、火薬は日本軍用の高級な黄色火薬であること、犯人と称する死体は阿片の中毒患者であることが一目瞭然で、持っていた暗殺趣意書も日本人が書いたとすぐわかる日本式漢文です。そして決定的な証拠は、爆薬と爆破装置を結ぶ電線の撤去を忘れたのか、それが橋脚から少し離れた関東軍の鉄道監視所に引き込まれていたということです。報告を受けた浜口雄幸総裁、やがて田中辭職の後を受けて首相になる浜口も驚きましたが、「事は党派を超えた国家的大問題である」として、これを政争の具にしないよう処置一切の総裁一任を求めました。

民政党が「満州某重大事件」として、議会でこの問題を追及したのは、年が明けた昭和四年一月二十二日です。永井柳太郎、中野正剛ら若手代議士が「満州某重大事件は、我が守備隊が当然の責務を捨てたがために起こったのである。吾人はその責任を問うているのである」――質問内容をもっぱら警備上の責任問題に絞り、これで陸軍大臣辭職に追い込み、田中内閣を倒そうとしたのですが、田中首相の答弁は苦しく「調査中」の一点張りです。しかも政府の厳しい検閲で、議会の質問も「満州某重大事件」とぼかしたものになり、張作霖の名前も日本軍の関与も出て来ないので、いま一つ迫力に欠ける論戦でした。最初は田中の方針を支持していた白川陸相も、議会で問題にされ、陸軍の軍事参議官会議で反対されると、組織防衛へと心変わりしていききました。「真相は公表せず、河本らは停職など行政処分にする」。こういう結論を出す、田中は「白川がなあ」と溜め息をついたといえます。田中が裁判所判事の書生をして松山にいた時、偶然向かいの家の子が白川で、白川が陸軍に入ってから何かと面倒を見てきましたから、白川なら自分の言うことを聞いてくれる、と信じていたのです。軍人を処罰する法的権限は陸軍大臣が握っていて、首相にはどうにもなりません。

田中内閣は六月二十六日、正式調査結果を発表しました。「満州事件調査の結果、日本人の關係せる証拠を認めず。ただし守備権放棄に対しては当局の責任を問ひ、それぞれ処分せり」。こういった内容で、關係者の行政処分は村岡関東軍

司令官の予備役編入、河本大佐の停職、齋藤参謀長と独立守備隊司令官水野竹三少将の譴責です。翌日、田中首相は参内して上奏しました。「いろいろ取り調べましたが、日本の陸軍には幸いにして犯人がいないということが判明いたしました。しかし警備上責任者の手落ちであった事実については、これを行政処分を以て始末致します」。しかし昭和天皇は、「それでは前と話が違うではないか。辞表を出してはどうか」と、強い語気で叱責されたのです。久原房之助は「田中の尊皇心は、ほとんど恐怖に心にも近いほどだった」と言っていますが、田中内閣は七月一日総辞職しました。そして田中は三か月も経たない九月二十九日、狭心症の発作で急死しましたが、自殺説が流れるほど突然の死であり、また淋しい最期でした。

田中内閣総辞職の日、河本の停職処分も発令されましたが、理由は「爆殺現場の警備に中国憲兵の配置を許した」という、警備担当参謀の責任を問われたものでした。河本の話だと「誰を首謀者にするかで、軍司令官がひどく悩んでいたのだ、私が責任をかぶると、自分から申し出た」んだそうです。河本は一年後に予備役になりましたが、陸軍首脳部挙げて河本復職に動いたことは、お手元の資料の小磯国昭軍務局長、戦争中東条英機の後を受けて首相になった小磯の河本宛ての手紙でも、よくわかります。しかし奈良武次侍従武官長を通じての工作も、天皇の強い反対で実現しなかつたのです。その代わりでしょう。いわば「陸軍ぐるみ」で河本の面倒を見たことは、満鉄理事、満州炭鉱理事長、山西産業社長という河本の経歴が、何よりも雄弁に物語っています。

「満蒙第一主義」の田中内閣が残したものは、いったい何だったのでしょうか。まず第一に、日中間が決定的に悪くなったことです。張作霖爆殺から四日後の昭和三年六月八日、蒋介石は北京に入城し、中国統一の悲願を達成しました。そして張学良はその年の十二月二十九日、蒋介石の国民政府に忠誠を誓い、満州の空には青天白日旗が翻つたのです。張作霖の葬儀の日、田中首相は日本政府代表として外交界の長老林権助を派遣し、財政、軍事援助をエサに抱き込みを図りましたが、張学良は乗ってきませんでした。実は張作霖爆殺の六月四日は張学良の誕生日で、北京で誕生パーティーを開いていたのですが、「誕生日が来るたびに父のこと、父の死を思い出すのは辛い」。誕生日を六月一日に変えたほど父を愛していたのです。ですから、山本満鉄総裁が満蒙五鉄道の交渉を再開しようとしたところ、張学良は「この問題は国民政府の交通部に移ってしまった」と冷たく言い放ったそうです。

第二に、国家を動かす政治力学の中で陸軍の比重を決定的に大きくし、日本の政治を軍閥政治に導くきっかけになったことです。田中の対中国積極政策に期待していた陸軍の中堅将校は、田中に対する失望と共に、政党政治の下での満蒙問題解決に見切りをつけました。しかも河本大佐らを軍法会議にかけずに軽い行政

処分で済ませたため、これが武力解決を主張するグループを活気づかせ、満州事変への道を開くことになったのです。昭和天皇も「沈黙する天皇」を作り上げていきます。イギリス式の立憲君主制、「君臨すれど統治せず」を理想とする元老の西園寺は、「天皇は自分の意見を直接表明すべきではない」と、二十七歳の若き天皇を諫めました。天皇も「あの時は自分も若かったから」と反省されていますが、これ以後、憲法の遵守を強く心がけられるようになります。明治憲法は「国務各大臣は天皇ヲ輔弼シ其ノ責メニ任ス」——つまり天皇の統治権は国務大臣の助言、補佐によつて行なわれると規定されていますから、内閣の決定に対しては、たとえ反対の意見を持っていても、裁可されることに決心されたのです。その後の日本の戦争の歴史を考える時、昭和天皇が平和を愛されていただけに、戦争に対して「ノー」と言われることを奪った、この張作霖事件はやはり日本の大きな分岐点だったと思います。